

ME ē と *great* の発音

今 里 智 晃

I サミュエル・ジョンソンは『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*. 1755) 編纂の仕事を公けに予告するための『企画書』(*The Plan of a Dictionary*. 1749) のなかで、

Some words have two sounds, which may be equally admitted, as being defensible by authority. Thus *great* is differently used.<sup>1)</sup>

(語によっては二種類の発音をもつものがあり、どちらも権威ある人物が太鼓判を押しているのと同じように認められているとしてよいのであろう。かくして *great* には違った使い方がある)

と述べている。この記述は、少なくとも18世紀半ばになっても ME ē をもつ単語の発音が全部ではないにせよまだ固定せず揺れていたことの証言記録になる。ジョンソン博士は「権威ある人物」としてロウ (Nicholas Row 1674–1718) とポープ (Alexander Pope 1688–1744) の脚音を引き合いに出した。すなわちロウの *seat* : *great*, ポープの *state* : *great* というカプレットである。

今日の発音から見れば *state* : *great* は [steit] : [greit] で問題はないが、*seat* : *great* の方は [siɪt] : [greit] となるから普通は脚韻を踏まない。ところが、ME ē は18世紀初頭に [eɪ] になっていたとする証拠が多いことを考えると *state* : *great* の場合は [steɪt] : [greɪt] だったのであろう。他方、ME ē をもつ語のほとんどが今日 [iɪ] になっているわけだが、もしこれが18世紀からということであれば *seat* : *great* が [seɪt] : [greɪt] の脚韻だったとは言い切れなくなる。*seat* が既に [siɪt] になっていたとなれば、むしろ [siɪt] : [griɪt] だったとする方が自然で無理がない。問題は *great* がある場合には [greɪt], 他の場合には [griɪt] と発音されていたかどうかである。

ジョンソン博士が1772年にこの頃のことを思い出して語った言葉をボズ

ウェルは記録した。

... when I published the Plan for my Dictionary, Lord Chesterfield told me that the word *great* should be pronounced so as to rhyme to *state*; and Sir William Yonge sent me word that it should be pronounced so as to rhyme to *seat*, and that none but an Irishman would pronounce it *great*.<sup>2)</sup>

(僕が『英語辞典』の企画書を出した時に、チェスターフィールド卿は僕に *great* という語は *state* と韻を踏むように発音すべきだと語ったのに対して、ウィリアム・ヤング卿は僕に伝言を寄こして、それは *seat* と韻を踏むように発音すべきであって「グレート」などと発音するのはアイルランド人ぐらいなものだと言ってきた)

チェスターフィールド卿が文人で政界の大立物なら、こなたヤング卿 (Sir William Yonge 1693–1755) も詩人・劇作家で、ジョンソン博士から「下院で最高の雄弁家」(the best speaker in the House of Commons) と折紙をつけられた政治家である。このような人物が *great* を [greɪt] と発音すればアイルランド訛りだと言っているとすれば、この時期にはまだ今日のように [greit] と二重母音化はしていないし——仮にそうであれば *seat* も [seit] となっていなければおかしい——そうかといって [greɪt] のように [ɛɪ] 段階で韻を踏んだ可能性もない。となれば *seat* と脚韻を踏むときの *great* は [griɪt] だったと考えられる。

*great* は、他の ME ē をもつ語が [iɪ] 段階まで高音化して ME ē をもつ語と同音になったにもかかわらず、*break*, *steak*, *yea* とともに [iɪ] にならずに [ei] と二重母音化したとされている。一般に考えられている ME ē の推移の過程は次の通りである。

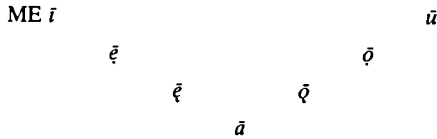
ME ē [eɪ] > [eɪ] > [iɪ] (e.g. ME *clēne* > ModE [kliɪn] 'clean')

そして例外的に、

ME ē [eɪ] > [eɪ] > [ei] (e.g. ME *grēt* > ModE [greit] 'great')

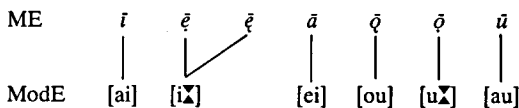
となったものがあるということであった。本稿ではこの二つの音推移の跡を特に *great* の発音を軸にして顧みて、*great* にも ME  $\bar{e}$  の通常の発展過程と同様に [i̯] 段階すなわち [gri̯t] という発音があったという可能性を探り、その後何故 [greit] と二重母音化したかという点についても触れてみたい。

Ⅱ いわゆる Great Vowel Shift (大母音推移) については、Ellis (1869-89)<sup>3)</sup> や Sweet (1888)<sup>4)</sup> を嚆矢として Dobson (1968)<sup>2)</sup><sup>5)</sup> に至る包括的な音韻史研究でほぼその全容が明らかになった。その結果、ME の長母音には次の音体系があったことが判明している。



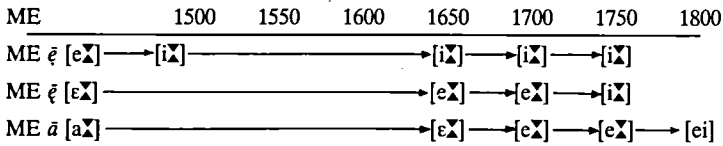
これら7個の長母音のうち ME  $\bar{i}$  と ME  $\bar{u}$  を除く5個がのきなみ調音点を上げる高音化現象を引き起こし、最上位にあった2個はそれ以上高くなって子音化することなく二重母音化した。ME  $\bar{i}$  > ModE [ai], ME  $\bar{u}$  > ModE [au] である。もちろん規模を問わなければどの時代にも音変化はあったし、変化という点から見ればなにも音韻面にとどまらない。生きた言語として使用されていく限り微妙な変化を繰り返し続けていくのが言語の本質だとも言えるだろう<sup>6)</sup>。しかし、15世紀から1800年にかけて生じた英語の長母音の変化の規模は他のどの時期のものに較べても顕著なほど大きかったため、大母音推移と呼ばれるようになったわけである。そしてこれが結果的に中英語と近代英語とを極めて明確に弁別するものとなった。

ME の長母音と ModE の音価を対応させると以下ようになる。



この対応関係を見ると、前母音の方に後母音の整然さを欠いた部分がある。すなわち、ME ē と ME ē̄ が完全に平行した展開を見せたのに対して、ME ē と ME ē̄ は完全な平行関係になっていない。ME ē̄ が ME ē との差を縮めることなく遂には [ou] と二重母音化したにもかかわらず、ME ē̄ の方は ME ē との差を次第に縮めて [i:] 段階で融合してしまったのである。高さの点で同じ舌の位置をもつ後母音の ME ē も great の場合のように二重母音化して [ei] となった方が通常の音変化だとみなすこともできる。ただし、その場合には ME ē > ModE [i:] の音変化の説明が必要なことは言うまでもない。

では ME ē は実際にどのような音変化をしたのか。Dobson (1968<sup>2</sup>) の記述をもとに隣接する ME ē と ME ā とともに図示してみよう。



ME ē̄ と ME ē は中英語の時期にはもちろん区別されていた。<sup>7)</sup> チョーサーらの詩人たちもそれぞれで押韻させ、両者を混同することはなかった。その ME ē̄ が既に1500年以前に高舌化して [i:] になったことについては、ほとんどの正音学者が認めている。<sup>8)</sup> Zachrisson (1912)<sup>9)</sup> や Wyld (1936)<sup>3, 10)</sup> はこの証拠を提出している。

ME ē̄ は17世紀の半ば頃には StE でも [e:] になった。それまでの状況を Dobson (1968<sup>3</sup>) は、

In the fifteenth, sixteenth, and early seventeenth centuries, careful educated StE had no close [e:] sound; ME ē̄ was already [i:] and ME ē was still open [e].<sup>11)</sup>

(15世紀から17世紀の初頭にかけては、教育ある人々が注意して用いる標準語に閉じた [e:] 音はなかった。というのも ME ē̄ は既に [i:] になっているし、ME ē はまだ開いた [e:] 音のままだったからである)

と説明している。つまり、その期間に新しい [iː] 音 (< ME ē) と [eː] 音との間に空白状態が生じ、その状態は次第に上昇する ME ē によって埋め合わせられるわけにしても、とにかく17世紀の半ばまで続くことになる。ME ē が [iː] 段階に到達し、既に [iː] になっていた ME ē と融合したのは18世紀の半ば頃とされる。

他方、ME ā については、[æː] 段階を経て17世紀の半ばに [eː], 1700年頃に [eː] に達したとされているが、これを受け入れると18世紀の初頭に ME ē と ME ā が [eː] 段階で同音になったということになる。ME ē が18世紀の半ばに [iː] 段階で ME ē と融合して今日に至っていることを考えれば、ME ē は一時期 ME ā と同音化しながらその後再び独自の道を進み、今度は ME ē と同音化するという不可解な動きを見せたことになる。また、Wyld (1936<sup>3</sup>) は ME ē (Wyld では  $e^2$ ;  $e^1$  は ME ē) と ME ā の同音化をこう推定した。

When  $e^1$  was raised to [i],  $e^2$  at first remained unaltered. At this point ME ā and ME ai, which, as we have seen, had by this time both been levelled under a single sound, caught up  $e^2$ , and thus the three originally distinct words were all represented by the single sound [ē], which was tending more and more to become tense.<sup>12)</sup>

( $e^1$  が [iː] に上昇しても  $e^2$  は初めそのままだった。この段階で ME ā と ME ai は——既に検討したように——この頃までには融合して同音になり、 $e^2$  に追いついた。従って、もともと別の音をもっていた3種類の語がすべて [ē] という同音で表わされるようになり、ますます閉じた音になっていく傾向を見せていた)

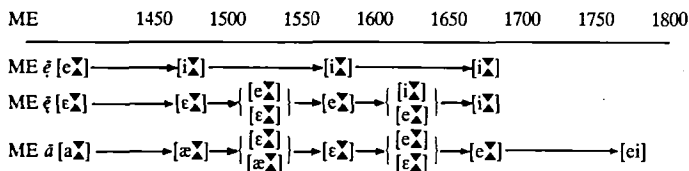
しかし、この同音化はあくまで [eː] 段階のことであり、閉じた [eː] でない点で Dobson (1968<sup>2</sup>) と見解を異にする。が、その違いがあったにしても、音韻の史的発展の過程でひとたび同音になった2つ以上の音がその後再び別々になるという例がないことからすれば、Wyld (1936<sup>3</sup>) も Dobson (1968<sup>2</sup>) もこの点では弱点になる。<sup>13)</sup>

これに対して、ME ē と ME ā はそもそも途中で合流などしなかったと主張するのが Horn (1954) である。

Me.  $\bar{e}$  und  $\bar{a}$  zeigen eine große Ähnlichkeit in ihrer Entwicklung: beide Laute werden ständig gehoben. Me.  $\bar{a}$  tritt in seiner Weiterentwicklung in die Stufe ein, die me.  $\bar{e}$  verlassen hat. Me.  $\bar{a}$  läuft hinter dem me.  $\bar{e}$  her, ohne es jemals einzuholen  $\bar{æ}$  (aus me.  $\bar{a}$ ) wird zu  $\bar{e}$ , nachdem  $\bar{e}$  (aus me.  $\bar{e}$ ) diese Stufe verlassen hat;  $\bar{e}$  (aus me.  $\bar{a}$ ) wird zu  $\bar{e}$ , nachdem  $\bar{e}$  (aus me.  $\bar{e}$ ) diese Stufe verlassen hat. Auf der Stufe  $\bar{e}$  macht me.  $\bar{a}$  Halt; die Hebung zu  $i$  findet nicht statt.<sup>14)</sup>

(ME  $\bar{e}$  と  $\bar{a}$  は非常によく似た発展をした。双方とも絶え間なく高音化したのである。ME  $\bar{a}$  は ME  $\bar{e}$  が離れた段階に向かって進んで行った。ME  $\bar{a}$  は ME  $\bar{e}$  のあとを追いかけたが、決して追いつくことはなかった。 $\bar{æ}$  (< ME  $\bar{a}$ ) は  $\bar{e}$  (< ME  $\bar{e}$ ) がこの段階を離れた後に  $\bar{e}$  になり、 $\bar{e}$  (< ME  $\bar{a}$ ) は  $\bar{e}$  (< ME  $\bar{e}$ ) がこの段階を離れた後に  $\bar{e}$  になった。ME  $\bar{a}$  は  $\bar{e}$  段階で止まり、 $i$  への高音化は生じなかった)

そこで Horn (1954) の記述をもとにして ME  $\bar{e}$ ,  $\bar{e}$ ,  $\bar{a}$  の推移の過程を図示してみると、



という具合になる。上図で例えば ME  $\bar{e}$  は、17世紀に入るや [e $\bar{X}$ ] の他に同時に StE の「進歩的な言葉使い」(in fortschrittlicher Sprache) では [i $\bar{X}$ ] 段階に早くも到達していたということを示す。これは音価推定に正音学者の記録を過度に評価した結果推定年代がやや遅めの感じがする Dobson に較べて、全体に到達年代が早めになっている。さらには「進歩的な言葉使い」を重視した点で、Dobson (そして先行する他の史的音韻論学者を含めて)<sup>15)</sup>と言語観が大きく異なるところである。

Ⅲ ME  $\bar{e}$  をもつ語は——推定年代には差が見られるにせよ——そのほと

んどが ME  $\bar{e}$  と [i:] 段階で融合した<sup>16)</sup>。そして例外的に *great, break, steak, yea* の 4 語だけが [i:] 段階に上がらず [e:] > [ei] となったとされている (結果的に PE [ei] 段階で ME  $\bar{a}$  と融合したことになる)。が、ここで問題になるのは、例えば *great* を引き合いに出せば、[gri:t] の段階はなかったのか、またさらには PE [greit] への音変化を促したものは何だったのかということである。

*great* に [i:] を充てた最初は Anon. (1695)<sup>17)</sup> だった。次の 18 世紀には ME  $\bar{e}$  を [i:] と教えるものが多くなる<sup>18)</sup> のは当然だが、Walker (1791) になると逆に *great* を [gri:t] と発音するのは「気取った発音」(an affected pronunciation) という具合に変わってしまう<sup>19)</sup>。*great* が他の ME  $\bar{e}$  をもつ語とともに [i:] 段階に上昇したとはっきり述べたのは Sweet (1888<sup>2)</sup>) である。

Towards the middle of the 18th cent. the sMn (ee) became (ii), not only in *sea, heal* etc, but also, in the mouths of many speakers, in such words as *break, great*, which are now always pronounced with (ei)..., which was preserved by the preceding r.<sup>20)</sup>

(18 世紀の半ば頃に sMn [=1600-1700 年の英語] の (ee) は (ii) となったが、*sea, heal* のような語だけではなく、*break, great* のような語においても多数の話し手で (ii) になった。ただし後者は今日常に (ei) と発音されるが、これは先行する [r] が原因である)

Sweet (1888<sup>2)</sup>) は *great* が [gri:t] になったことを推定しながらも、先行する子音 [r] の影響で [greit] になったと仮定した<sup>21)</sup>。しかし、他方で *preach* や *stream* など同じ条件下で [i:] になったままの語が多数存在する事実を考えると、[greit] への音変化の原因としては不十分である。たとえ [gri:t] の段階があったとしても [gri:t] > [greit] という直接の音変化はあり得ず、[greit] への音変化を起し得る前段階として [gre:t], すなわち [e:] 段階が想定されなければならない。Luick (1914-40) は地域方言音を証拠に出した。

Neben dieser normalen Entwicklung sind in einigen Fällen auch mundartliche Lautungen in die Gemeinsprache eingedrungen. Bei me.  $\bar{e}$  ist

dies der Falle in den Wörtern *great*, *yea*, *break* und *steak*. Sie durchliefen zunächst die normale Entwicklung, in der ersten Jahrzehnten des 18. Jahrhunderts setzten sich aber die südwestlichen Mundarten eigene Lautung (ē) fest, die in der Gemeinsprache um diese Zeit dem me. ā zukam, daher diese Fälle sich von da an wie ā-Wörter weiter entwickeln.<sup>22)</sup>

(少数の語の事例で、このような通常的发展と並び方言の発音が標準語に入った。ME ēについては、*great*, *yea*, *break*, *steak*などの語のケースがこれにあたる。これらの語は当初は通常的发展をたどったが、18世紀の最初の数十年間に南西部方言に特有の (ē) が確定し、この音はこの時期の標準語では ME ā に相当するものだった。それ故、以後はこれらの語の場合も ā をもつ語と同じような发展をさらにしていくのである)

これに対して Wyld (1936<sup>3</sup>), Kökeritz (1953), Dobson (1968<sup>2</sup>) らは ME ē > ModE [ej] をむしろ通常の音変化と規定し、ME ē > ModE [iɹ]の方は通常のもではなかったとする立場をとった。このうち Wyld は [iɹ] への音変化を地域方言音に由来する説にこだわる<sup>23)</sup>が、Kökeritz<sup>24)</sup>と Dobson は異音説をとる。

The [iɹ] pronunciation in 'ME ē words' does not go back to ME ē at all; it goes back to a late ME ē variant, commonly developed from ME ē in ME times, but often older still. ...throughout the ModE period there was a struggle going on between two ways of pronouncing 'ME ē words'; the ME variant with ME ē, now become ModE [iɹ], gradually displaced the more normal variant with ME ē whose development stopped at [eɹ] and which became identical with ME ā.<sup>25)</sup>

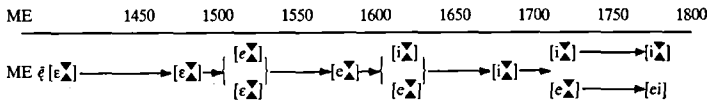
(‘ME ē をもつ語’の [iɹ] 音は ME ē に遡らない。中英語期に ME ē から一般に発展した late ME ē の異音に遡るものだが、それよりも古い場合も多い。……近代英語期を通じて‘ME ē をもつ語’の発音には2通りあり、双方で鏝を削っていた。つまり ME ē をもつ ME の異音が、ME ē をもつ通常の音で [eɹ] 段階で推移が止まり ME ā と同音化したものに次第に取って代わり、ModE [iɹ] になって今日に至るわけである)



従って、Dobson (1968<sup>2</sup>) にしてみれば、ME  $\bar{e}$  [ē] > ModE [ē] (> PE [ei]) が最終的に [ī] 段階まで到達したのであれば音変化と定義できるが、ME  $\bar{e}$  の異音 [ē] (既に ModE 期の早い段階で ME  $\bar{e}$  をもつ語とともに [ī] へ高舌化していた) の動きは、正確に言えば「近代英語の音変化」(a ModE phonetic change) にはあらず単に「発音法の置き換え」(the displacement of one mode of pronunciation by another) にすぎぬということになる。しかし、これはあくまで [ī] 段階へ到達したのが異音であるとする前提に立っての論議でしかない。

Horn (1954) はこれと異なりやはり ME  $\bar{e}$  > ModE [ī] の変化を通常のものとし、*great* のように [ei] への変化を促したのは「音調」(Ton, Tonbewegung) だと考えた。音調と発音の関係、前者が後者に及ぼす影響を初めて考察したのが Horn とベルリン大学だったのである。音調説を簡単に言えば、「高い音調」(Hochton) の時に調音点が引き上げられるということで、*great* が ME  $\bar{e}$  [ē] > [ē] > [ī] という具合に通常の音変化を経て、それ以上高くなり得ないところから [ī] > [ei] と下がったと推定した。

本稿ではこの音調説をもう少し進め、



ME  $\bar{e}$  は17世紀の後半には StE で ME  $\bar{e}$  と [ī] 段階で融合したが、1700年頃から新たに一段低い異音が生じ、両者はしばらくの間併存して用いられた後に異音の [ē] が [ei] と変化したものと考えたい。その証拠として18世紀の詩に用いられた脚韻を調べてみた<sup>26)</sup> (便宜上順番を変えてある)。

- (i) *great*, *break* など PE [ei] をもつ語と他の ME  $\bar{e}$  (又は ME  $\bar{e}$ ) との脚韻:

Great : Seat (J. Pomfret), break : speak (J. Swift), great : Chert (A. Pope), great : seat (N. Rowe, R. Burns), great : sweet (N. Rowe, W. Whitehead), break : weak (J. Gay), breaks : speaks (J.

Grainger), *great* : *conceit* (C. Smart)

(ii) *great*, *break* など PE [ei] をもつ語や他の ME ē と ME ā との脚音:

*Great* : *Estate*, *great* : *Rate* (J. Pomfret), *Dream* : *same* (W. Congreve), *great* : *Fate*, *Created* : *hated* (M. Prior), *Retreat* : *Fate* (A. Finch, N. Rowe), *Creature* : *Nature* (J. Swift, R. Burns), *great* : *state* (A. Pope, T. Parnell, R. Savage, J. Cunningham, T. Chatterton, G. Crabb), *Great* : *Fate* (A. Pope, T. Gray), *eat* : *State* (A. Pope), *eat* : *fate* (E. Young), *creates* : *elates* (J. Thomson), *break* : *forsake* (D. Mallet), *retreat* : *state* (I.H. Browne), *mead* : *shade* (M. Akenside), *creat* : *annihilate*, *creation* : *Imitation* (R. Lloyd), *creates* : *Fates* (W. Whitehead), *beat* : *fate* (T.G. Smollett), *neat* : *estate* (J. Cunningham), *greate* : *estate* (W.J. Mickle), *break* : *take* (W. Cowper), *created* : *elated* (H. More), *break* : *wake* (W. Blake)

(i)のグループの右側の語は、ここには出ていないが ME ē をもつ語同士あるいは ME ē をもつ語と脚韻を頻繁に踏んでいるので、当然ながら [i̯] 音で *great* や *break* と韻を踏んだことになる。そして(ii)のグループの右側の語は ME ā をもつ語なのでむしろ [i̯] 段階には達せず、またこの時期に [ei] と二重母音化を起こすわけもないから、当然ながら [e̯] 音を示していたと考えられる。かくして、本稿の冒頭に引用したロウの *seat* : *great* は [i̯]、ポーブの *state* : *great* は [e̯] をそれぞれ示し、これは PE [ei] をもつ *great* がその前段階として18世紀の前半に [i̯] とともに [e̯] をもっていたことを証明するものになっている。

IV 従来の音韻史はいわゆる例外というものについての配慮が足りなかったように思われる。*great* ら4語が他の ME ē をもつ語と異なる変化を受けたのが形態上の特徴からでないとするれば、何か語の意味に音表象面での妨げとなるものがあって、それが通常の音変化と一線を画す動きを引き起こした原因とみなすこともできる。もしかすると *great* は [gri̯t] より口を大きく開いた [greit] の方が「大きい、広い」という概念に適合すると無意識のうちに感じられたのかも知れない。その意味では、従来の音韻史

は Dobson も含めて依然として音法則の呪縛にかかった 'Neogrammarian' 的性質を受け継いでいると言ってもよいであろう。

## 〔注〕

- 1) Samuel Johnson, *The Plan of A Dictionary of the English Language* (1747; rpt. The Scholar Press, 1970), p. 13.
- 2) G.B. Hill and L.F. Powell ed. and rev. *Boswell's Life of Johnson* (Oxford, 1934, 1971), vol. II, p. 161.
- 3) Alexander J. Ellis, *On Early English Pronunciation* (1869–89; rpt. Haskell House, 1969)
- 4) Henry Sweet, *A History of English Sounds* (London, 1874; Oxford, 1888)
- 5) E.J. Dobson, *English Pronunciation 1500–1700* (Oxford, 1957, 1968<sup>2</sup>)
- 6) 17世紀に見られた言語悲観論を例にとれば、言語は放っておけば自然に（それも悪い方向に）変化してしまうものという共通の認識がその根底にあった。Cf. H.M. Frasdieck, *Der Gedanke einer englischen Sprachakademie* (Jena, 1928), pp. 49–50.
- 7) ME には  $\bar{e}$  (閉じた  $\bar{e}$ )、 $\bar{e}$  (開いた  $\bar{e}$ ) の他に OE の開音節の  $e$  に由来する中間の  $e$  音もあった。これは標準語では ME  $\bar{e}$  と合流してしまったものの、一部の方言（例えば Yorkshire 地方）では近代英語になってもこの差が残存した。e.g. ME *grēne* > ModE [grɪ̃n] 'green', ME *dēl* > ModE [diəl] 'deal', ME *ete* > ModE [eit] 'eat' Cf. Sweet, §651; K. Luick, *Untersuchungen zur englischen Lautgeschichte* (Strassburg, 1896), §202.
- 8) J. Palsgrave, T. Smith, W. Bullokar, W. Waad らがこれを認めぬ少数派だが、いずれも綴字の保守性に拘泥している感じがする。Cf. Dobson, p. 651.
- 9) R.E. Zachrisson, *Pronunciation of English Vowels 1400–1700* (Göteborg, 1913), pp. 69–71.
- 10) Henry C. Wyld, *A History of Modern Colloquial English* (Basil Blackwell, 1920, 1936<sup>3</sup>), p. 206.
- 11) Dobson, p. 617.
- 12) Wyld, p. 209.
- 13) 飯田 (1975) は生成音韻論の立場から、ME  $\bar{e}$  と ME  $\bar{a}$  の [ẽ] 段階における同音化があったとしてもその後の ME  $\bar{e}$  の発展を規則的音変化とすることは矛盾しないと説いている。Cf. 飯田秀敏「ME  $\bar{a}$  と ME  $\bar{e}$  の同音化に関する生成音韻論的考察」『名古屋大学文学部研究論集』LXIV (1975), pp.61–77.
- 14) Wilhelm Horn, *Laut und Leben*, bearbeitet und herausgegeben von Martin Lehnert (Deutscher Verlag der Wissenschaften, 1954), p. 283.
- 15) Dobson は研究の対象として教養ある人々が意識の中で「かくあるべき」と考えていた発音を中心に据えたが、その結果それ以外の発音は軽視され、「進歩

的な言葉使い」(advanced speech) も単に「標準英語」の周辺に見られたひとつの現象というような捉え方をした。Cf. Dobson (1968<sup>7</sup>), 'Preface to the first edition'.

- 16) ME ē が子音 [r] の直前の場合には, (i) PE [i(ə)]: e.g. *ear, rear, cohere, etc.* (ii) PE [e(ə)]: e.g. *bear, pear, there, etc.* などに変化した。
- 17) *The Writing Scholar's Companion* (1695), ed. by E. Ekwall, Neudrucke neuenglischer Grammatiken, 6 (1911).
- 18) 速記者の証言については, Cf. W. Matthews, *English Pronunciation and Short-hand in the Early Modern Period* (Univ. of California Press, 1943), pp. 154–56.
- 19) Cf. John Walker, *A Critical Pronouncing Dictionary and Expositor of the English Language* (London, 1791, 1822<sup>24</sup>), §241. なお, 次の§242では *break* に触れており, [briːk] はやはり「気取った発音」(affectionately pronounced) だという評がある。
- 20) Sweet, §822.
- 21) *OED* もこれと同じ説をとっている。
- 22) Karl Luick, *Historische Grammatik der englischen Sprache* (Bernhard Tauchnitz, 1914–40; Basil Blackwell, 1964), §500.
- 23) Wyld, pp. 209–12.
- 24) Helge Kökeritz, *Shakespeare's Pronunciation* (Yale Univ. Press, 1953), pp. 173–80, 194–209.
- 25) Dobson, pp. 611–12.
- 26) David N. Smith (ed.), *The Oxford Book of Eighteenth Century Verse* (Oxford, 1926).

## ME $\bar{e}$ and the Pronunciation of *great*

Chiaki IMAZATO

ME  $\bar{e}$  was a close  $e$  [e $\bar{\Delta}$ ], and ME  $\bar{e}$  an open [e $\bar{\Delta}$ ]. They were kept strictly apart in ME and EModE. ME  $\bar{e}$  must have begun to move towards [i $\bar{\Delta}$ ] in the 15th century. About 1500 [i $\bar{\Delta}$ ] is attested for certain. Even when ME  $\bar{e}$  was tensed to [i $\bar{\Delta}$ ], ME  $\bar{e}$  was still open [e $\bar{\Delta}$ ] for some time. The raising of ME  $\bar{e}$  to [e $\bar{\Delta}$ ], according to Dobson 1968<sup>2</sup>, took place at least towards the middle of the 17th century, while Horn 1954 assumes that the development began in the latter part of the 16th century. After that ME  $\bar{e}$  was raised to [i $\bar{\Delta}$ ] and fell together with the reflex of ME  $\bar{e}$ .

Wyld 1936<sup>3</sup> suggests that so far as the [i $\bar{\Delta}$ ] pronunciation in 'ME  $\bar{e}$  words' is concerned, StE had adopted a pronunciation developed in some dialect. Dobson states that ME  $\bar{e}$  in StE itself became [i $\bar{\Delta}$ ] by a gradual phonetic change is false. The [i $\bar{\Delta}$ ] pronunciation in 'ME  $\bar{e}$  words' does not go back to ME  $\bar{e}$  at all; it goes back to a late ME  $\bar{e}$  variant, which has become PresE [i $\bar{\Delta}$ ]. Kökeritz 1953 in of his opinion on that point. This variant completely fell together with the reflex of ME  $\bar{e}$ .

Strangely enough ME  $\bar{e}$  has become PresE [ei] in four words—*great*, *break*, *steak*, *yea*. Although it is quite doubtful whether the [ei] pronunciation in all of these four words is to be explained in the same way, the falling together with ME  $\bar{a}$  under [ei] took place in the 18th century. ME  $\bar{a}$ , which has become PresE [ei], must have begun to be fronted to [a $\bar{\Delta}$ ] in the 15th century, and then through the intermediate stages [æ $\bar{\Delta}$ ], [ε $\bar{\Delta}$ ], [e $\bar{\Delta}$ ], it was finally diphthongized to [ei] about 1800.

This paper aims to clarify the development of ME  $\bar{e}$  in the Modern English period, centering on the raising to the stage [i $\bar{\Delta}$ ], and consider when and how ME  $\bar{e}$  was finally diphthongized to [ei] in four words—*great*, *break*, *steak*, *yea*. Taking *great* for example, Dr. Johnson said Lord

Chesterfield told him that *great* should be pronounced so as to rhyme with *state*, while Sir William Yonge sent him word that it should rhyme with *seat*. It was impossible for *seat* to rhyme with *state*, because the former must have been raised to [i<sup>ɪ</sup>] when the latter was tensed to [e<sup>ɪ</sup>]. Then a question arises as to how *great* was pronounced in the early 18th century. To find the solution of this problem, rhyme evidences are collected and examined in this paper. As a consequence of this survey, it is made clear that *great* was frequently pronounced [grɪ<sup>ɪ</sup>t] so as to rhyme with ME ē words like *seat*, etc., and, at the same time, [gre<sup>ɪ</sup>t] so as to rhyme with ME ā words like *state*, etc.